

「夢」を語れるか

上司が部下を指導する時、部下の「夢」を知っているかどうかで、指導の難易度が変わる。また、部下も上司の「夢」を知っていれば、指導される感情も変わってくる。忘年会や納涼祭などは、部下や上司の「夢」を聴く絶好の場といえよう。

自分の「夢」を皆の前で発表することは、自分自身に「夢」を再認識させ、その言葉が耳から入って脳に強く定着する。何度も繰り返すことで、「夢」のイメージを強く具体化させることができる。「夢」の原動力は「憧れ」のイメージ化といえよう。

「今期の売上は去年の200%を目指そう！」と目標を語った時、部下から「それは無理ですよ」と言われるかもしれない。そのとき、「目標だから頑張れ！」と言う返答もあるが、部下に大きな「夢」を与えるために、「憧れ」や「その気にさせる」ストーリーを描いて伝えることで、大きな成果にすることもできる。

ケネディ大統領は1960年代に月への有人飛行を宣言した。真空管を使った電子回路の時代に、人類が月に行くことは想像もつかなかったので、国民はすぐに応援しなかったが、「夢」を信じる人たちの情熱と行動や説得力で1969年7月20日にアポロ11号が月面着陸に成功した。

「月に行きたい」という情熱が大きな一歩となり、「夢」は現実となったわけだ。こういったストーリーが「憧れ」のイメージとなる。「夢」の原動力は、「憧れ」を作ることから始まると考えられる。

「夢」とよく似たものに「ビジョン」がある。例えば、「卒業したらデザイナーになるぞ！」とか、「3年以内に公認会計士になるぞ！」とかは仕事の目標といえる。ビジョンとは「夢」とは違い、掲げられた目標の基本になる自分の「思い」や「願い」だと考えられる。

なぜデザイナーなのか、なぜ公認会計士なのか、その具体的な答えがあるのなら、それはビジョンなのだ。自分にとって具体性があり、将来の自分の歩むべき道筋が間違っていないと思うものならば、それはビジョンなのである。「夢」はビジョンほどリアリティがなく、「憧れ」も含まれ、個人的な次元のものが多いいえよう。

「夢」は行動に落とし込みにくいものであるが、自身と周囲の人々に憧れや希望のイメージが作りやすくなる。「夢」を語ることで、皆を心身ともにほんわかと満たされた気持ちにさせることもできるというわけだ。

きょうは、ちょっと難しい話だったかな。